

母親の被養育経験が子どもへの養育態度に及ぼす影響

木本美際・岡本祐子

The influence of mothers' experience in being brought up on her parenting attitudes to her children

Migiwa Kimoto and Yuko Okamoto

本研究は、一般の母親を対象に虐待の実態を把握し、虐待の世代間連鎖率と連鎖の抑止要因を検討することを目的とした。質問紙調査においては、一般の母親においてもかなりの高率で虐待の世代間連鎖が生じており、虐待の発生防止には、夫の育児サポートおよび夫との関係が重要であることが示された。また、虐待の世代間連鎖を抑止する要因には、サポート資源の豊富さも重要である可能性が示唆された。面接調査では、被虐待経験の有無により、被養育経験の捉え方、および親イメージが大きく異なることが示された。虐待の世代間連鎖が生じている人は、育児へのサポートが少なく、また親から依存欲求を満たしてもらえなかったために子どもとの間に役割逆転が生じていた。連鎖が生じなかった人は、子ども時代に親以外の大人との情緒的交流を持つことができていたために、葛藤を子ども時代に解消できていたことが示唆された。

キーワード：虐待、世代間連鎖、非臨床群

問題および目的

近年、連日のように児童虐待による子どもへの被害が報道されている。児童相談所への虐待通告の件数は増加の一途をたどり、その深刻さが問題となっている。西澤(2004)は、公表された数値の裏には膨大な数の潜在的な事例が存在する可能性を指摘している。そこで、非臨床群における母親に対する潜在的な虐待の実態を把握し、心理学的要因との関連を検討することは、虐待の発生子防と虐待に対する適切な援助に役立つと考えられる。

棚瀬(1996)によれば、虐待の発生要因として、①母親自身の被虐待体験あるいは何らかの被剥奪体験、②子どもに対する認知的歪曲、③限界を超えた危機状況の存在、④社会的援助の欠如の4条件が揃う必要がある。その他にも虐待の発生要因として母親の被虐待経験を挙げている研究は多い(斎藤, 1992; 西澤, 1994; 武田, 1998)。虐待の世代間連鎖とは、虐待を受けて育った親が、自分の子どもを虐待するようになることである。渡辺(2000)は、「葛藤の世代間伝達」を、「親自身が受けた心の傷や親子関係の葛藤が、誰にも理解されぬまま、心に深く抑圧され続ける時、何気ない日常生活のふれあいの瞬間に、思わず無意識的に子どもに伝わること」とし、親自身の親子関係の特徴やパターンが子ども

との間で反復され、親子関係の葛藤が連鎖していく状態と説明している。

虐待に関連した親子関係の情動は、普段は無意識のものである(渡辺, 2000)。虐待を受けて育った母親は、子どもの頃に依存欲求を満足させてもらえない。そのような母親は、子どもの頃得られなかった欲求の満足を自分の子どもに求めようとして、役割逆転が生じてしまう(西澤, 1994)。子どもがその親の欲求を満たすことができないと、母親はそれを子どもからの拒否と感じ、自己防衛的に子どもを拒絶してしまうようになる(渡辺, 2000)。また虐待を受けた母親は、被害者から加害者になることによって子どもの頃の傷を癒そうとするのである。

虐待の世代間連鎖がおこる割合は、研究によって結果が多少異なるが、30～50%程度(kaufman & Zigler, 1987; 西澤, 1994; 中谷, 2002; 中嶋, 2005)であるといわれている。これより、虐待という現象はある程度世代を越えて伝えられていくものであるといえる。一方、見方を変えると、被虐待経験をもちながらも、虐待傾向を示さない親が少なくとも50%はいるということである。つまり、その50%は、虐待の連鎖から脱却できたことを示す。では、被虐待経験をもちながらも、虐待の連鎖を断ち切った親たちがどのようにしてそれを可能にしたのだろうか。それを知ることによって、虐待傾向を示す親に対する適切な介入方法の手がかりを得ることができるのではないだろうか。

渡辺(2000)は、虐待の連鎖は、内省的自己を育むことにより克服可能であると述べている。内省的自己とは、自分の幼児期の辛さを、正直に情緒的に捉える力のことである。Caliso & Milner(1992)によれば、世代間連鎖をしない親は、子どもの頃に、大人から安定したサポートを受けていた。Hunter & Kilstorm(1979)や鶴飼(2000)は、世代間連鎖をしないためには、幼児期の被虐待経験を隠さずに怒りを表現し、それを詳細に語れること、より広範にわたる社会的サポートを受けていることなどが必要であるとしている。

虐待という経験は、人生において大きな危機的経験・状況であるといえる。福丸(2003)は、危機的状況におかれているにもかかわらず心理・社会的にもある程度健康で適応的な状態を維持し生活する現象やプロセスを理解する際にレジリエンス(resilience)という言葉を用いてそれを説明している。彼女は、レジリエンスに関連する要因を個人、家庭、社会の3次元から整理している。まず、個人の要因として性別、ある程度の知能レベル、自己効力感、内省力、洞察などがあげられている。次に、家庭要因として、自己効力感が重要であり、これは少なくとも一人以上の大人との暖かい関係によって促進されることを強調している(Schaffer, 1998 無藤他訳 2001)。また、社会的要因として、友人や近所の人、学校の先生や他のよき指導者の存在が考えられる(Rutter, 1987)。これらの特性は、それぞれが単独で作用するのではなく、相互に関連しあって個人の発達や適応に影響しており、どれかひとつの要因が決定的な影響を及ぼすわけではない(福丸, 2003)。このレジリエンスに関する考え方は、虐待という問題にも当てはまる。虐待の世代間連鎖から抜け出すことのできた親は、このレジリエンスの特性のどれかを持っている、あるいは、獲得できたのではないだろうか。

虐待の予測・予防の観点から、非臨床群の親を対象に行った虐待研究に、社会福祉法人子どもの虐待防止センター(2001)が首都圏の母親を対象に行った虐待の実態調査がある。その結果、約一割の母親が子どもに虐待行為を繰り返していることがわかった。大原(2003)も、非臨床群を対象に幼児を持つ母親の虐待に関する調査を行った。その結果、虐待群は、実家および現在の家族環境ともに葛藤得

点が高く、自分の母親から愛情を受けていないと認知している傾向が高いことが明らかになった。

また、武田(1998)は、「介入といった状態にならなくとも、家庭の中で行われている小さな虐待」が多く存在しているとし、非臨床群における潜在的な虐待が存在していることと、その発生防止の重要性を主張している。しかし、わが国では、非臨床群における虐待研究が少ないだけでなく、心理学的要因との関連も十分な検討がなされていない(中嶋, 2005)。

虐待の予防・効果的介入の観点から、非臨床群における虐待の実態や要因に関する研究は急務であると思われる。特に虐待発生の大きな要因として挙げられている虐待の世代間連鎖を断つ要因についての研究はわが国には見当たらない。そこで、本研究では、非臨床群の母親における虐待がどの程度潜在し、連鎖がどれくらいの割合で生じているのか、および、母親は、自分の親子関係の葛藤をどう捉え、それが子どもへの養育態度とどのように関連しているのかを検討することを目的とする。

研究 I

目的

研究 I では、非臨床群の母親にどの程度虐待行為が行われているのかを調査し、虐待の連鎖率および虐待の連鎖と育児へのサポート資源との関連を検討することを目的とする。

方法

(1)調査対象者 就学前の子どもを持つ母親 374 名を対象として質問紙調査を行った。そのうち、回収されなかったものと記入上不備のあるものを除いた 146 名を分析対象とした。調査時期は、2006 年 1 月～7 月に A 保育園、B 幼稚園にて配布してもらい、記入した質問紙を同封した封筒を担任の先生へ手渡し、あるいは郵送してもらい回収した (回収率 40.64%)。

(2)手続き 質問紙調査。中嶋 (2005) で用いられた質問項目のうち自尊心、母性意識、攻撃性を除いた以下の 5 項目を用いた。①回答者の属性 (性別、年齢、家族構成、親族の同居および近在の有無、子どもの人数、それぞれの性別の年齢)、②育児サポート、③配偶者の育児サポート、④被虐待経験 30 項目、5 件法「全くない～いつもそうだった」(0～4 点)、⑤子どもへの虐待相当行為 14 項目、5 件法「全くない～いつもそうだった」(0～4 点)。

結果

(1)回答者の属性 母親の平均年齢は 33.38 歳 ($SD=4.10$) であった。対象者の属性について Table1 に示した。93.84%と大半が核家族で、祖父母との同居は、5.48%と 1 割にも満たなかった。祖父母が近所に住んでいるのは、52.05%と、約半数がサポートを受けやすいと思われる環境にあった。

(2)育児サポートの数 育児サポートについて Table2 にまとめた。自分以外で普段育児に携わっている人として回答した項目数の平均は 1.68 個(範囲 1～4)、相談に乗ってくれる資源の平均回答項目数は、2.87 個(範囲 1～7)、実際助けてくれる資源の平均回答項目数は、2.02 個(範囲 0～4)であった。実際の子育てには、配偶者の他、祖父母、保育所が多くかかわっており、困ったときに相談に乗ってくれる人は、配偶者、祖父母、近所の友人が多く、気軽に話せる人がサポート資源であることが示された。困

ったときに実際に助けてくれる人は、配偶者、祖父母、近所の友人と、生活圏内にいる人が主であった。

Table 1 調査対象者の属性

	人数 (人)	割合 (%)
家族構成		
核家族（母子家庭）	137	93.84
お子さんにとっての祖父母と同居	8	5.48
4世代以上	1	0.68
その他	0	0.00
お子さんからみた祖父母との状態（複数回答）		
同居	9	6.16
近所に住んでいる	76	52.05
遠方に住んでいる	70	47.95
いない	0	0.00

Table2 育児サポート

	人数 (人)	割合 (%)
自分以外に普段育児に携わっている人（複数回答）		
配偶者	108	73.97
祖父母	43	29.45
祖父母以外の親戚 （自分のきょうだいを含む）	4	2.74
保育所、ベビーシッターなど	91	62.33
困ったときに相談に乗ってくれる人（複数回答）		
配偶者	101	69.18
祖父母	98	67.12
祖父母以外の親戚 （自分のきょうだいを含む）	29	19.86
近所の友人	87	59.59
近所に住んでいない友人	36	24.66
保育所以外の専門機関の職員	6	4.11
保育所、ベビーシッター先の職員	41	28.08
育児雑誌	11	7.53
特にいない	4	2.74
その他	6	4.11
困ったときに実際助けてくれる人（複数回答）		
配偶者	102	69.86
祖父母	102	69.86
祖父母以外の親戚 （自分のきょうだいを含む）	17	11.64
近所の友人	43	29.45
近所に住んでいない友人	6	4.11
保育所以外の専門機関の職員	1	0.68
保育所、ベビーシッター先の職員	15	10.27
特にいない	6	4.11
その他	3	2.05

Table3 配偶者の育児サポート

	人数 (人)	割合 (%)
配偶者がもう少し家事や育児に頑張ってくれた り、協力してくれたらいいのに…と思う		
全く思ったことがない	24	17.91
たまにそう思う	49	36.57
時々そう思う	26	19.40
しばしばそう思う	20	14.93
毎日そう感じている	15	11.19
あなたは、配偶者との関係が安定していて、何でも話せますか		
いつもそうである	50	37.31
概ねいつも関係が安定していて、何でも話せる	49	36.57
時によって、関係が安定していて、何でも話せる	17	12.69
たまに関係が安定していて、何でも話せることがある	9	6.72
最近では関係が不安定で、話すことも迷う	9	6.72
配偶者が子どもを手荒に扱うので、気になったり、心配することがある		
全く感じたことがない	78	58.65
たまにそう感じる	36	27.07
時々そう感じる	14	10.53
しばしばそう感じる	5	3.76
毎日そう感じる	0	0.00

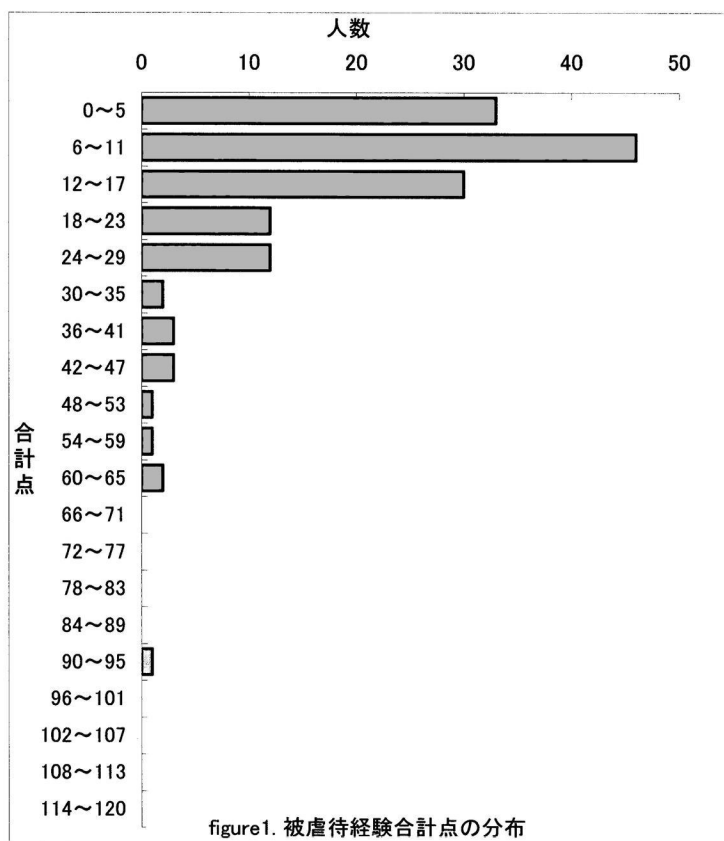
(3)配偶者の育児サポート 配偶者の育児サポートについて Table3 に示した。約 8 割が配偶者に対して「もう少し協力してほしい」と感じている一方で、約 7 割は、配偶者との関係が安定していると回答している。配偶者の子どもへの接し方については、約 4 割が「心配」と回答していた。

(4)被虐待相当経験 被虐待相当経験 30 項目の合計点の分布を Figure 1 に示す。平均は 14.26 点 (SD=13.66,中央値 10 点) で,0 点から 93 点に分布した。

合計得点が高得点の人から 25%,つまり,合計点が 18 点以上の 37 名を被虐待経験あり群とした。被虐待相当経験あり群は,本調査の 30 項目のうち,9 項目以上に「たまにそうだった (2 点)」と回答するか,6 項目以上に「時々そうだった (3 点)」と回答していることになり,臨床的に妥当であると考えられる。

(5)虐待相当行為 子どもへの虐待相当行為 14 項目の合計点の分布を Figure2 に示す。平均は 9.92 点 (SD=5.43,中央値 9 点) で,得点は 0 点から 30 点に分布した。

合計得点が高得点の人から 25%,つまり,合計点が 14 点以上の 37 名を虐待相当行為あり群とした。虐待相当行為あり群は,本調査の 14 項目のうち,7 項目以上に「たまにそうだった (2 点)」と回答するか,5 項目以上に「時々そうだった (3 点)」と回答していることになり,臨床的に妥当であると考えられる。



(6)世代間連鎖について 被虐待相当経験の有無と虐待相当行為の有無の内訳を Table4 に示した。被虐待相当経験の有無と虐待相当行為の有無の組み合わせにより,対象者を次の 4 タイプに分類した。子ども時代に被虐待相当経験を持っており,子どもへの虐待相当行為を行っている親を虐待連鎖群 (以下連鎖群) ,子ども時代に被虐待体操等経験を持っており,子どもへの虐待相当行為を行ってい

ない親を虐待の世代間連鎖なし群（以下連鎖なし群）、子ども時代に被虐待相当経験がなく、子どもへの虐待相当行為を行っている親を虐待群、子ども時代に被虐待相当経験がなく、子どもへの虐待相当行為を行っていない親を虐待なし群とした。

被虐待相当経験あり群における連鎖群の割合を算出した（連鎖群の母親（人）÷子ども時代に被虐待相当経験がある母親（人）×100（%））結果、世代間連鎖率は、45.95%であった。一方、被虐待相当経験を持たないのに、子どもへの虐待相当行為を加えている人の割合は、18.35%であった。このことより、被虐待経験を持つ人のほうが、子どもへの虐待相当行為を生じさせるリスクが 2.5 倍以上であることが明らかにされた。

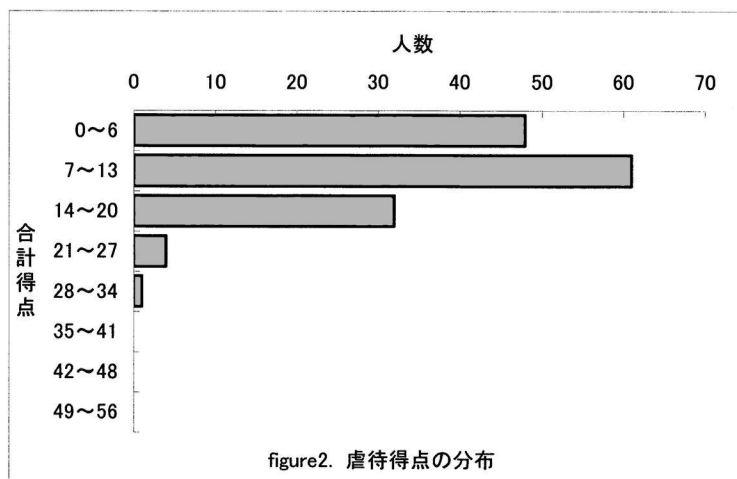


Table4 被虐待相当経験と虐待相当行為の割合

	虐待なし	虐待あり	合計
被虐待相当経験あり	連鎖なし群 20人 (54.05%)	連鎖群 17人 (45.95%)	37人
被虐待相当経験なし	虐待なし群 89人 (81.65%)	虐待群 20人 (18.35%)	109人

(7)育児サポート、配偶者との関係および被虐待経験と虐待相当行為との相関 育児サポート、配偶者との関係、および被虐待経験と虐待相当行為との関係を検討するために、相関係数を算出した。その結果を Table5 に示した。実際に育児に携わっているサポート資源の多さは、相談に乗ってもらうサポート資源の多さと育児を助けてもらうサポート資源の多さで有意な相関が見られた。配偶者の非協力は、相談に乗ってもらうサポート資源や育児を助けてもらうサポート資源と有意な負の相関がみられた。配偶者とのネガティブな関係は、相談に乗ってもらうサポート資源と育児を助けてもらうサポート資源で有意な負の相関があり、配偶者非協力和被虐待相当経験得点で有意な正の相関があった。また、虐待相当行為得点は、配偶者の非協力和配偶者とのネガティブな関係、被虐待相当経験得点と有意な正の相関があった。

Table5 育児サポートと被虐待経験、虐待得点との相関

	子育て	相談	助け	協力	関係	被虐待	虐待
子育てに携わっている人	-						
相談に乗ってくれる人	.22 *	-					
実際に助けてくれる人	.27**	.60**	-				
配偶者の協力	-.04	-.23**	-.30**	-			
配偶者との関係	-.12	-.35**	-.30**	.42**	-		
被虐待得点	-.02	-.24**	-.16	.15	.22*	-	
虐待得点	-.12	-.13	-.11	.29**	.33**	.24**	-

* $p < .05$ ** $p < .01$

(8)虐待相当行為発生に関連する心理的要因の検討 被虐待経験,および育児サポート,配偶者のサポートと虐待相当行為との関係を検討するために,虐待相当行為を従属変数,被虐待経験,育児サポート,配偶者の育児サポートの各項目を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果,配偶者サポート,配偶者との関係,被虐待経験で有意な結果が得られた (Table6)。

Table6 被虐待相当経験および育児サポートと、虐待相当行為との重回帰分析の結果

	β	p
子育てに携わっている人	-.10	.22
相談に乗ってくれる人	.03	.78
実際に助けてくれる人	.05	.63
配偶者の非協力	.19	.04
配偶者とのネガティブな関係	.22	.02
被虐待相当経験得点	.18	.04

(9)虐待の連鎖とサポート資源との関連 被虐待経験を持つ母親で,世代間連鎖をする親としない親の間でサポート資源に違いがあるかを検討するために,被虐待経験の有無を独立変数,育児サポート,配偶者の育児サポート,および配偶者との関係を従属変数として t 検定を行ったところ,普段の子育てに携わっている資源の数においてのみ有意傾向 ($t(35)=-1.78, p < .10$) がみられ,虐待の世代間連鎖が生じている親のほうが普段の育児に携わっている資源の数が少ないことが明らかになった。

考察

非臨床群における虐待相当行為

虐待相当行為の質問項目において,軽度の体罰や叱責をしている母親の割合が 6 割以上みられた。これは,虐待相当行為得点の平均が 9.92 点,つまり,平均すると 14 項目中 5 項目以上に「たまにある」と回答していることに相当する。非臨床群の母親においても,子どもに虐待相当行為を繰り返している人がいることが示された。多くの母親が「ある」と回答した虐待相当行為の内容は軽度のものであったが,母親に多くのストレスがかかることによって重篤な虐待へと発展する可能性があると考えられる。よって,虐待の発生予防と虐待に対する援助を考える上で,非臨床群の母親における虐待の実態や心理的要因との関連を検討していくことが必要である。

被虐待相当経験および虐待の世代間連鎖率と育児サポートとの関連

被虐待相当経験について,約 6 割以上が「ある」と回答している項目は,「平手やげんこつでたた

かれた」,「しかられるとき,大きな声でどなりちらされることがあった」という軽い体罰や叱責に関するものであった。この二つの項目は,子どもへの虐待相当行為と共通する項目であり,それらと比較すると,どちらの項目も低い割合で経験されているという結果が得られた。近年,虐待問題に関してマスメディアが頻繁に取り上げるようになったことによって,「自分も虐待をしてしまいそう」,「自分のしていることは虐待かもしれない」という不安から自分の子育てに自信をなくしている母親が,増えてきている(平田,2001)。このように社会全体の虐待問題に対する意識の高まりによって自分の子どもに対する行為が虐待に相当するかということに対して母親たちが敏感になっているために,自らの行為に厳しい評価を下している可能性が考えられる。

本研究の結果における世代間連鎖率は,45.95%であり,これは Kaufman & Zigler (1987) が提唱している 30%±5%という数値よりかなり高い数値となった。しかし,本研究では,多くの母親が回答している項目は軽度のものであり,虐待的な行為が「ある」と答えた母親であっても深刻な虐待をしているとは言えない。中谷(2002)の研究では,マルトリートメントを含んだ数値として連鎖率 50%という結果を報告している。これらのことから,本研究においても虐待行為の中にマルトリートメントを含んでいると考えられるため,この連鎖率はほぼ妥当な数値と言えるであろう。また,被虐待相当経験を持つ母親のほうが被虐待相当経験を持っていない母親よりも虐待相当行為を生じさせている確率が 2.5 倍以上であったことや,重回帰分析の結果からも,被虐待相当経験が虐待発生の大きなリスク要因であることは明らかである。しかし,虐待の世代間連鎖の有無によってサポート資源に違いがあるかを検討した結果,連鎖を生じていない母親のほうが普段の子育てに携わっている資源の数が多く示された。このことより,被虐待相当経験は,虐待発生のリスク要因であるが,子育てサポート資源が,連鎖を抑制する要因の一つとして役立つ可能性があることが示唆された。

研究Ⅱ

目的

虐待の世代間連鎖が生じている母親とそうでない母親,および被虐待相当経験のない母親間で被養育経験の捉え方と子どもへの養育態度を比較,検討し,連鎖を断つ要因を検討する。

方法

(1)調査対象者 研究Ⅰの調査対象者の中から,引き続き面接調査への協力を承諾してくださった方 5 名。調査時期は,2006 年 9 月中旬から 10 月上旬,調査場所は対象者の自宅,あるいは大学の研究室である。

(2)手続き 研究Ⅰで得られた被虐待得点と虐待行為得点によって対象者を 4 群にわけ,各群に割り振った (Table4)。そのうち,面接調査への協力を承諾を得た 5 名に半構造化面接を行った。面接調査協力者の分類を Table7 に示した。対象者のプロフィールと質問紙で回答した項目を Table8, Table9 に示す。面接調査実施前に,研究の目的,趣旨を説明し,面接承諾書に署名後,現在の育児について,子供の頃の母親のイメージ,母親の育児が自分の育児にどう影響していると考えているかについて語ってもらった。面接実施回数は各 1 回,面接時間は,対象者 1 人当たり 55 分から 70 分であった。

面接内容は1名を除いて調査対象者承諾の上、ICレコーダーに録音し、後日、逐語記録を作成した。録音の承諾を得られなかった1名は、面接中の筆記記録をもとに逐語記録を作成した。なお、本研究は、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

(3)質問項目

1. 現在の育児について

- ・ 育児観・信念（普段、どのようなことに気をつけて子育てをしているか）
- ・ 悩み・苦勞（どのようなことに大変さを感じるか）
- ・ 母親像（子どもの頃どのような母親になろうと思っていたか）

2. 子どもの頃の母親について

- ・ 母親との思い出（心に残っている思い出、そのときの気持ち）
- ・ 母親のイメージ（子どもの頃の母親はどんなイメージか、イメージの変化はあるか）

3. 母親の育児について

- ・ 母親の育児の良い点（どのようなところを参考にしているか）
- ・ 悪い点（「まねしないでおう」と思うこと）
- ・ 母親の育児が自分の育児にどのように影響していると考えているか

(4)結果の整理 面接調査の結果は、後日、逐語記録を作成し、この逐語記録をもとに分析を行った。質問項目ごとに発言内容を整理し、特徴を抽出した。各対象者の語りを育児信念や被養育経験の捉え方やそれに伴う感情に関する内容に分類した。複数の対象者に共通して見られた内容について育児信念や被養育経験の捉え方の特徴を考察した。そして、各々の調査対象者を個別に臨時的、事例的に分析し、被養育経験の捉え方が現在の育児に及ぼす影響についての把握と考察を試みた。

Table7 対象者の分類

	虐待相当行為なし	虐待相当行為あり
被虐待相当経験あり	虐待なし群 (A)	連鎖群 (C)
被虐待相当経験なし	虐待なし群 (B, D, E)	該当者なし

() 内は該当する対象者を示す。

Table8 対象者のプロフィール

	A	B	C	D	E
年齢	33歳	34歳	34歳	44歳	36歳
家族構成	夫	夫	夫	夫	夫
	長女 (5)	長女 (3)	長女 (6)	長女 (7)	長女 (4)
	長男 (3)		次女 (4)	次女 (4)	長男 (0)
日常の子育てに携わっている人	配偶者・祖母・親戚・近所の知人	配偶者	幼稚園	配偶者	配偶者
相談に乗ってくれる人	配偶者・祖母・親戚・近所の友人・保育所の先生	配偶者・近所に住んでいない友人	祖父母・近所の友人	配偶者	祖父母・近所の友人
実際に助けてくれる人	配偶者・祖父母・親戚・近所の友人	配偶者	配偶者・祖父母	近所の友人	配偶者・祖父母
配偶者との関係	安定	概ね安定	時により安定	安定	不安定
被虐待経験得点	20点 (被虐待あり)	4点 (被虐待なし)	20点 (被虐待あり)	2点 (被虐待なし)	5点 (被虐待なし)
虐待行為得点	9点 (虐待なし)	5点 (虐待なし)	17点 (虐待あり)	6点 (虐待なし)	8点 (虐待なし)

Table 9 各対象者が「ある」と回答した項目

事例	被虐待相当経験	虐待相当行為
A	<p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親に平手やげんこつでたたかれた ・何も悪いことをしていないのに、怒鳴られたり、罵られた ・親は、一方的に自分に意見に従うよう私に強要した ・親に、私が傷つくようなことを言われた ・叱られるときに、自分が叱られるのは当然だと思った ・押し入れや小屋など、一室に閉じ込められた ・しかられるときに理由があって、それ相応のしかられ方だと思った <p>「時々」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まだ私が幼いときに、親は家を子どもだけにして、どこかに出かけてしまうことがあった ・叱られるとき、大きな声で怒鳴り散らされたことが 	<p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんが泣いていても、ほうっておくことがある ・平手やげんこつでお子さんをたたくことがある ・お子さんを無視することがある <p>「時々」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんを無視することがある
B	<p>「一度だけ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親に、私が傷つくようなことを言われた ・叱られるとき、大きな声で怒鳴り散らされたことがあった <p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親に平手やげんこつでたたかれた 	<p>「一度だけ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんが傷つくようなことを言うことがある <p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大声で怒鳴ってしかることがある ・平手やげんこつでお子さんをたたくことがある
C	<p>「一度だけ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きょうだいや他の家族と差別扱いされた ・親に棒など何かのものをういてたたかれた ・親は、一方的に自分の意見に従うように私に強要した ・私は両親に望まれていない子だと感じた ・冬に家の外やベランダに締め出されたことがあった <p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親に平手やげんこつでたたかれた ・何も悪いことをしていないのに、怒鳴られたり、罵られた ・親に、私が傷つくようなことを言われた ・叱られるときに、自分が叱られるのは当然だと思った ・押し入れや小屋など、一室に閉じ込められた ・ほんの些細なことでも、親に 	<p>「一度だけ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・押し入れや小屋などに閉じ込めることがある ・平手やげんこつでお子さんをたたくことがある ・冬にベランダや家の外に締め出すことがある ・家に小さなお子さんを（お子さんが幼かった頃）、おいたままでかけた <p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんが泣いていても、放っておくことがある ・お子さんが傷つくようなことを言うことがある ・自動車の中に小さなお子さんを（お子さんが幼かった頃）おいて、用を足した ・お子さんを無視することがある
D	<p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・叱られるとき、大きな声で怒鳴り散らされたことがあった 	<p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんが傷つくようなことを言うことがある ・大声でどなってしかることがある ・平手やげんこつでお子さんを叩くことがある
E	<p>「一度だけ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親に平手やげんこつでたたかれた ・叱られるとき、大きな声で怒鳴り散らされたことがあった <p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まだ私が幼いときに、親は車に乗せたまま、用を足しに行ってしまうことがあった <p>「時々」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・叱られるときに、自分が叱られるのは当然だと思った 	<p>「たまに」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お子さんが傷つくようなことを言うことがある ・大声でどなってしかることがある ・自動車の中に小さなお子さんを（お子さんが幼かった頃）おいて、用を足した ・家に小さなお子さんを（お子さんが幼かった頃）、おいたままでかけた

結果と考察

発言内容をもとに5事例のうち質問項目ごとに共通する特徴を抽出した。

現在の育児に関する語りの特徴

育児に関する語りを整理し、Table10に示した。その結果、子どもを育てていく上で気をつけていることとしては、①社会的ルールを守る(事例 B,C,D)、②自主性を尊重する(事例 A,B)、③子どもの要

望にこたえる(事例 A,E), ④安全(事例 B,E)の4つの特徴が抽出された。①の社会的ルールを守る以外は、子どもの人格形成や情緒的交流,保護に關することであり,幼兒期の子どもの健康的な発達にとって重要な要素に關することであった。どんな子に育ててほしいかということに關して, ①自由に(事例 A,B), ②健康・元氣(事例 B,C), ③自分の意思を持った子(事例 D), ④素直な子(事例 E)という4つの特徴が抽出された。育児に關する苦勞・悩みについては, ①信念と現実の葛藤(事例 A,B,D), ②子どもへの対応(事例 A,E), ③育て方への不安(事例 A,B,C), ④子どもへの嫌惡感(事例 C), ⑤すまいと思っけていてもついしてしまうこと(事例 C,D)の5つの特徴が抽出された。育児をする上での充実感, ①子どもの成長(事例 A,B,D), ②家庭円満(事例 C)の2つが抽出された。

虐待相当行為のないAさん, Bさん, Dさん, Eさんは,現在の育児に關する悩みに關して,子どもへの対応の仕方や子どもの発達への不安,今後の育児方針など,具体的な自分の育児信念に基づいた子育てをしていく上での困難や苦勞が語られ,子どもがよりよく成長できるようにといった,子どもを中心に据えた内容のものであった。一方,連鎖群であったCさんは,したくないのに虐待的行為をしてしまうこと,自分の子育てに対する不安など,自分の辛さが中心に語られ,子ども自身の人格形成や成長などに關する信念などは語られなかった。このことから,育児が思い通りに行かないことにより,育児信念について考える余裕も無いほど追い詰められている状態にあると考えられる。

Table10 5 事例の現在の育児に關する語りの特徴

質問内容	分類	反応内容例	対象者
子供を育てる上で気をつけていること	社会的ルールを守る	「人のものを取ったり, そういうときには注意して(B)」 「一般的な常識を崩したらやっぱしそれはだめよみたいな(C)」	B,C,D
	自主性を尊重する	「自分がやりたいっていうことはなるべくやらせるように心がけて(A)」 「あしるこうしるって言わないようにしようとは思ってるんですけど(B)」	A,B
	子どもの要望にこたえる	「家事の途中でも何かしてほしいとか言うときは少し中斷してきりのいいところでまた家事をするようにしてます(A)」 「できるだけ要望にこたえてあげるようにしてますね(E)」	A,E
	安全	「怪我をしないように(E)」	B,E
どんな子に育ててほしいか	自由に	「人に迷惑をかけなければ好きなように(A)」 「自由であればいいって感じなんで(B)」	A,B
	健康・元氣	「健康で自由であれば(B)」 「元氣でいてくれたらいいと(C)」	B,C
	自分の意見を持つ	「しっかりとした意見を持ってくださいって。人に流されなくてくださいっていうのは言ってる(D)」	D
	素直な子	「素直な子に(E)」	E
どこに悩み・大変さを感じるか	信念と現実の葛藤	「いろいろ希望はあるんですけど, 嫌がるのにやらせるのには抵抗が(A)」 「(スイミングに)行かせてるんですけど, 本人たぶんやめたいのかな(B)」	A,B,D
	子どもへの対応の仕方	「片方は外に出たいって言って片方は中で遊びたいって言うときは, どちらかをなだめたりするんですけどどっちも譲らないので, 大変ですね(A)」	A,E
	子育てへの不安	「うまくできてるんですかね(A)」 「育て方を間違ったかなとか(C)」	A,B,C
	子どもへの嫌惡感	「甘えてこられたらちよつとうつとおいしいなと思うことがあるんですよ(C)」	C
	ついしてしまう	「言葉の虐待じゃないけど, あなたはどうのこうのって言ってしまふから(C)」 「言っちゃったりしますね, はー, うちはだめだねって(D)」	C,D
充実感を感じる時	子どもの成長	「ほんといつの間にかできるようになったっていうのがいっぱいあって(B)」 「意外なところでしっかりしてたんだっていうことを発見したとき(D)」	A,B,D
	家庭円満	「家族でお弁当とか作って公園とかか行っけて遊んでるときとか(C)」	C

被養育経験に関する語りの特徴

調査対象者の被養育経験に関する語りを整理し、Table11 に示した。その結果、心に残っている親との思い出として語られた特徴は、①旅行・外出(事例 A,B,E)、②母の手作り(事例 D,E)、③親戚との情緒的交流(事例 A)、④親への反発(事例 A,B,D)、⑤同胞葛藤(事例 A,B,C)、⑥甘えた記憶がない(事例 A,C)、⑦体罰・叱責(事例 A,C)、⑧習い事の強制(事例 A,B)の 8 つであった。

親のイメージに関しては、①怒っている(事例 A,C,D,E)、②厳しい(事例 A,B)、③甘えられない(事例 C)、④飾らない人(事例 D)、⑤気性が激しい(事例 E)の 5 つの特徴が抽出された。

子どもの頃の母親との思い出については、被虐待相当経験あり群である A さん、C さんは、「ない」、あるいは、しかられたり、自分が泣いていたというような否定的な思い出が多く語られた。また、A さん、B さん、C さんで共通して語られた思い出の一つに同胞葛藤がある。この 3 名は、全員長女であり、弟妹との扱いの違いに葛藤を感じていた。一方、被虐待相当経験なし群である B さん、D さん、E さんでは、旅行へ連れて行ってもらったことや、手作りの洋服に愛情を感じたことなど、ポジティブなエピソードが多く語られた。

また、子どもの頃の親のイメージは、A さん、B さん、C さんは肯定的なイメージではなかった。A さんでは、母親との思い出やイメージはほとんど語られず、その代わり、父親のことが多く語られた。語られた父親イメージは、「怒られるかなとか常に念頭にあった」程に「怖い存在」であり、父親の存在がかなり大きく恐ろしいものであったことが伺える。しかし、A さんは、両親以外に隣に住む叔母夫婦との楽しかった思い出も同時に語られており、両親から得られなかった情緒的な交流を家庭の外で得ることが出来ていたと考えられる。C さんでは、情緒的なかかわりがなかったことが繰り返し語られ、ポジティブな思い出は全く語られなかった。これより、C さんは、両親から愛情を感じることが出来ない環境にあったと推察される。一方、D さん、E さんは、ポジティブなイメージだけでなく、「いつもガミガミ」、「気性が激しい」などネガティブな側面も同時に併せ持っていることが示された。

このように、被虐待相当経験の有無によって語られるエピソードの質に違いがあることが示された。被虐待相当経験を持つ人は、子どもの頃の葛藤が多く想起され、ほとんどそれに圧倒されてしまうようである。一方、被虐待相当経験のない人は、否定的なイメージもあるが、それを補うに余りある肯定的親イメージを持っていると考えられる。これは、母親の良い側面と悪い側面を一つの全体的対象として分裂していた両母親像が統合に至っている状態であると考えられる。反対に、被虐待相当経験を持つ人は、その統合がうまくいっておらず、“悪い母親”だけを自分の母親に見ているために、否定的な語りが多く見られたと考えられる。

育児の影響について

被養育経験の影響に関する語りのまとめは、Table12 に示す。その結果、親の育児の良い点・参考になっている点に関して①取り入れている(事例 A,B,D,E)、②何もない(事例 C)の 2 つが抽出され、親の育児の悪い点・真似しないでおこうと思う点に関して①真似しないようにしている(事例 A,C)、②したくないがしてしまう(事例 C,D)、③真似できないし、しようとも思わない(事例 B)の 3 つが抽出された。

被虐待相当経験なし群である B さん、D さん、E さんは、母親の育児をほとんどが肯定的に捉えてい

るが、影響しているという意識は具体的にはあまりない。ほぼ意識することなく親の育児を踏襲している状態であり、自分なりの子育て観を築いている。一方、被虐待相当経験あり群であるAさん、Cさんは、自分が育つ中で経験した葛藤や辛さを自分の子どもに繰り返すまいと考えており、それを意識して子育てにあたっている。しかし、Cさんは、自分がされた虐待的行為の一部を繰り返しており、それが自分の被養育経験に由来していると意識してはいるもののそれをとめることができずにいる。

Table11 5 事例の子どもへの頃に関する語りの特徴

質問内容	分類	反応内容例	対象者
心に残っている思い出	旅行・外出	「何かと結構旅行に連れて行ってもらいましたね (B)」 「日帰りで紅葉を見に行ったり、街まで出て買い物して食事して帰りたいなことを毎週してましたね (E)」	A, B, E
	母の手作り	「すべて手作りですね、私の洋服って言うのはね (D)」 「マドレーヌをよく作ってくれました (E)」	D, E
	親戚との交流	「育てられたような感じで。お風呂に入るのもどっかに連れて行ってもらうのもその隣のおじさんおばさんに連れて行ってもらった感じ (A)」	A
	親への反発	「父とはぶつかることが多かったんで (A)」 「高校の時はよくそういうことでけんかしてましたね (B)」	A, B, D
	同胞葛藤	「私ばかりだめって言われてるみたいな印象があった (A)」 「扱いが違うんじゃないみたいなものなんかすごい (B)」	A, B, C
	甘えた記憶がない	「そんなに遊んだとか何かしたっていうことはないんですけど (A)」 「だっこしてもらった記憶とかそういうのが全くなくて (C)」	A, C
	体罰・叱責	「口よりも手が先に (A)」 「まず弟とけんかしたら怒られてた記憶がよくありますね (C)」	A, C
	習い事の強制	「やりたくないって思いながら通ってた印象が (A)」 「習い事をいっぱいしてた。自分の意思に関係なく入らされてた (B)」	A, B
親のイメージ	怒っている	「父親は怖い存在だったんで、怒られるかなとか常に念頭にあった (A)」 「いつもガミガミ。時にはうるさいとは思いましたね。 (D)」	A, C, D, E
	厳しい	「結構厳しかったんで (A)」 「遊び心がないっていうか、なんか厳しいっていう感じですかね (B)」	A, B
	甘えられない	「お母さんのイメージは、甘えたことがないなって、自分が (C)」	C
	飾らない人	「あの人は全く飾らない人だったので、素朴にありのままの姿を見せてくれたっていう思いはありますね。ありのままにっていう感じ (D)」	D
	気性が激しい	「泣いて笑って。気性が激しい人ですね。言いたいことも言うし (E)」	E

Table12 5 事例の親の育児の影響に関する語りの特徴

質問内容	分類	反応内容例	対象者
良い点・参考にしている点	取り入れ	「父を立ててるのはいいかな。その方が家庭としてはいいのかな (A)」 「厳しく言われてて、でも今となってはよかったと思うんですよ (B)」	A, B, D, E
	何も無い	「参考にしている点は…別に何もありませんね (C)」	C
悪い点・真似したくない点	真似しないようにしている	「父が手をあげる人だったので、何かあるたびにたたかれてたんで、なるべく手はあげないようにしてますね (A)」 「私はお姉ちゃん、お姉ちゃんってずっと言われてたからお姉ちゃんとは言わないでおこうと思って、上の子を (C)」	A, C
	したくないがしてしまう	「甘えさせてくれなかったから、子どもにはもっと思ってるんだけど、それがなかなかできなくて (C)」 「自分の中でそんなに母親にはそういう風に言ってほしくなかったなと思いつつもおんなじことを言ってる自分に気がきます (D)」	C, D
	真似しようとも思わない	「人間として本質が違うので、私あそこまで厳しく出来ないと思ってるので (B)」	B
どんな影響かわからない	影響している	「影響してるのかな? (B)」 「あるかなあ、あるのかなあ? (E)」	B, E

事例の概要

【事例 A, 33 歳, 連鎖なし群 (被虐待相当経験得点 20 点, 虐待相当行為 9 点)】

現在の育児に関して, 子どもの自主性を尊重することと, 子どもが興味を持っていることを一緒に楽しんであげることを心がけている。子育てをしていく中で大変さを感じるのは, 子ども二人の個性に応じてそれぞれに対応するのが難しいこと。自分なりに考えて対応してはいるが, うまく対応できているかはあまり自信がない。

子どもの頃は, 三人姉妹の長女であったため期待も大きく, 習い事を毎日のようにさせられていた。飲み込みの早い妹たちに対してプレッシャーを感じ「すごい嫌だなと思いながら通って」いた。父親の「結果を出さないと」いけないという方針のため, 小学校の間はずっと嫌々通っていた。父親は, 口よりも手が出るような「怖い存在」であり, 叱られるときは「話は聞いてられなくて怖いばかり」であった。また, あらゆることの決定権は父親にあり, どうすれば承諾が得られるかを一生懸命考えていた。「必ず一回は反対したいタイプ」の父親は後になると許してくれることもあった。そのような父親とのやり取りの中で, 相手の意見も聞いて自分でもう一度考え直すことを学んだ。母親は, 祖父の介護に忙しく, 一緒に遊んだ思い出はない。父親に叱られたときやお願い事があるときも, 「母は全然ノータッチ」で特にフォローをしてくれることなどはなかった。しかし, 隣に暮らす叔母夫婦がよくしてくれ, 父親に怒られたときの「逃げ場」になっていた。叔母夫婦は「上手に話を聞いてくれ」, 父親になぜ叱られたかを納得いくように説明してくれる「いい関係」であった。祖父が亡くなり高校に入った頃から, 家族全員で食事をするようになり, 父親に部活の話をしたり, 授業でわからなかったところを教えてもらうなど少しずつ一家団欒の時間を持つようになった。年齢を重ねるにつれ, 一緒にドライブに行くなど父親との交流も増え, 父親のイメージは「丸く」なったように感じる。

育児の影響については, 習い事を多くさせられていた経験から, 子どもたちには無理にはさせたくないという思いがあり, 子どもたちが興味を持ったことをさせるようにしている。父親のような「怖い存在は家庭の中で大事」とは思うが, 決して手は上げないようにしている。

A さんは, 習い事の強要や, 父親による軽い体罰や叱責など軽度の虐待に近い環境にあったと考えられる。また, 祖父の介護に忙しい母親との親子としての情緒的交流は少なかったと考えられる。しかし, A さんの両親のイメージは完全に否定的なものではない。「反対したいタイプ」と父親を客観的に分析し, 父親とのやり取りから学んだことを評価している。また, 大人になってからのイメージは肯定的なものへと変化している。これは, 隣に住む叔母夫婦との関係が A さんを支えていたためではないかと考えられる。A さんは, 両親から得られなかった暖かい関係を叔母夫婦に自ら求めていくことによって大人との情緒的交流を持つことが出来ていた。Caliso & Milner(1992)は, 世代間連鎖を断ち切ることが出来た人は, 子ども時代の親以外の大人からの情緒的サポートを得ることが出来ていたと述べている。また, Walsh(1988)は, resilient な子どもは家庭が混乱していても家庭の外で自分に愛情を持って接してくれる存在を自ら積極的に求めていくことも多く, 懸命な人間関係を選択し, 健康な家庭で育った配偶者を選ぶこともしばしばであると述べている。A さんは, 夫との関係も

良好であり、叔母夫婦に自ら愛情を与えてくれる場を求めていくというレジリエンスを持っていたと考えられる。Aさんが虐待の連鎖を生じていないのは、こういったAさんのレジリエンスが大きく関与していると思われる。また、叔母夫婦という大人の存在によって支えられたAさんは、両親の養育による葛藤を解消し、客観的に捉えることができるようになったため、自分の育児には、そのような葛藤を繰り返さずにすんでいると考えられる。

【事例B, 34歳, 虐待なし群 (被虐待相当経験得点4点, 虐待相当行為5点)】

現在の育児において、気をつけていることとしては、集団生活でのルールなどを教えてあげること。子どもには人の気持ちのわかるような優しい子になって欲しいと願っている。幼稚園入園前、トイレトレーニングを焦って終わらせようとしたが、入園した途端、自然とできるようになり「言ってもだめだな」と思うようになった。ある程度は厳しくして、それ以外は健康であれば自由に育てて欲しいと考えているが、周囲に流されてもっと習い事をさせてしまいそうな不安もある。「損をさせたくない」という気持ちと、「人と同じようにできなくてもいい」という気持ちの間で揺れている。

子どもの頃、母親は「厳しい人」であり、少しでも校則を破ることが許されなかった。「皆してるよ」と言い返していたが、一切許してもらえなかった。母親には自分の考え方があり、それに従わないことは許されなかった。そんな母親は「遊び心がない」「公務員って感じがする」。中学生くらいまではそれが普通だと思っていたが、高校になると、校則違反を許してもらえないことでよくけんかしていた。自分は許してもらえなかったが、弟はうるさく言われていないことが不満だった。勉強に関しても厳しく、「自分の意思に関係なく」習い事をさせられていた。優等生だった母親は、勉強できる子になってほしいと思っていたのだろうが、自分は必死に勉強したということではなく、「こんな風に育てる予定じゃなかったのに」と思っていると思う。

母親の育児の影響については、よくわからない。幼い頃から厳しく言われてきたが、今となっては良かったと思う。もし甘やかされて育てたら道を踏み外していたかもしれない。そのため、「子どもにはある程度嫌われても厳しくしたほうがいい」と思っている。また、子どもを「あんなことも出来ないのか」と思われるような子にはしたくないと思っているため、ある程度厳しくする必要はあると思っている。厳しくしてもらったおかげで自分が道を外れなかったのを「ありがたい」と思っているが、母親とは「人間として本質が違うので、私あそこまで厳しく出来ない」と思っている。

Bさんは、被虐待相当経験がないにもかかわらず、母親とのことに関してネガティブなエピソードが繰り返し語られた。Bさんには、母親の少しの違反も許さない厳しさや勉強の強要などに対して幼い頃から葛藤があり、また、優秀な母親とその母親の期待に応えられなかったことに対して劣等感があつたと考えられる。それをBさんは、「人間として本質が違う」と自分を母親と区別し、別の人間として考えている。そのため、子どもには自由にさせたいと思っている。しかし、実際には、一生懸命トイレトレーニングをさせたり、子どもが嫌がっている習い事をさせていたりしている。その行動の裏には、他の子どもより劣る子にしたいくないという母親と同じ思いや自分の劣等感が隠されていると考えられる。解消されないままの葛藤は、無意識に子どもに伝わり(渡辺,2000)、それによつ

て子どもがその葛藤を引き受けることになる可能性もある。そして、それが虐待の引き金になる可能性もあり、B さんの場合、葛藤の強さは大きくはないと考えられるが、B さんの行動は無意識であるため、葛藤の世代間伝達は起こる可能性は否定できないと考えられる。

【事例 C, 34 歳, 連鎖群 (被虐待相当経験得点 20 点, 虐待相当行為 17 点)】

現在の育児において、気をつけていることは、社会的なルールを守ること。子どもたちには「元気でいてくれたらいい」と思っているが、なかなかうまくいわずに苦勞している。夫の転勤により、周囲に頼れる人がおらず、子どもも離れてくれないことが大変。子どもがぐずると「自分の子どもだけが反抗してる気がして。何で自分の子だけこんなにぐずぐず言うの」と思ってしまう。また、言うことを聞かないときは「言葉の虐待」のようにきつく叱ってしまう。それを「カウンセリングしてほしいくらい」「ちょっとやばいと」感じている。子どもに対して腹が立つのは、自分が「思ってることに反した」時。子どもが甘えてくると「うっとおしいと思うことがある」。子どもがあまりにしつこく泣いていると、感情的になり、子どもを外に締め出すこともある。

子どもの頃、母親は「ずっとキーキー言ってた」イメージで、一番記憶に残っている思い出は、「弟とけんかしたら怒られてた記憶」。母親に甘えた記憶はなく、いつも父親の側にいた。父親は優しいというよりは、「あんまり怒られた記憶がないって感じ」であった。両親からは、優しい言葉をかけてもらった記憶がなく、思春期に友人関係で悩んだり、辛いことがあったとしても親には言えなかった。

育児の影響について、親の育児で参考にしている点は「別に何も無い」。子どもが甘えたくてぐずると「それがわかるから余計拒否を起こして」しまう。甘えさせることが出来ないのは、「やってもらってないから」かもしれない。小さい頃は、「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と言われるのがとても嫌だったため、長女は名前前で呼ぶようにしている。勉強するようには言われなかったが、「だから勉強できなかった」のだと思い、子どもには言うてしまう。

C さんは、子どもの頃は、母親との暖かい情緒的関わりが希薄であったことを繰り返して語っている。子どもの頃の肯定的な思い出は全く語られず、わずかな怒りすら表現している。C さんはそのような自分の被養育経験が虐待的であると認識している。また、自分の子どもへの行為も虐待的であると自覚しており、自分の育児に対して危機感を感じてはいるものの、それをとめることが出来ずにいる。これは、子どもの頃に親から得られなかった依存欲求を無意識的に子どもに求めてしまった結果、甘えてくる子どもに対して「自分はしてもらってないのに」という気持ちが生じ、腹が立ってしまうという、役割逆転の現象であると考えられる。また、C さんには、被虐待経験のみならず、周囲からのサポートが得られにくい孤立した状況、夫との関係の不安定さなど、虐待発生のリスク要因が幾重にも存在している。C さんは、自分の過去に対する怒りや今の状況の辛さを語るにもかかわらず、それを受け止めてくれる場所がないために今の虐待的な行為を抑えられなくなっていると考えられる。

【事例 D, 44 歳, 虐待なし群 (被虐待相当経験得点 2 点, 虐待相当行為 6 点)】

現在の育児では、子どもには「自分自身で物事を決めることが出来て、人の意見に左右されないし

っかりとした、自分なりの哲学を持って生きていける人間になってほしい」という信念のもと、それにはどうすれば良いかを一番に考えながら子育てをしている。しかし、現在の環境として、子どもが周囲に流されやすい状況にあるため自分の信念を貫き通して子育てをすることがなかなか難しい。

子どもの頃の母親は、洋裁が得意で、洋服は全て母親手作りの「世界に一着しかない服」だった。厳格な祖母の家に預けられていた母親は、昔からのしきたりや風習を教え込まれて育ち、それを受け継いでいた。そんな母親に対し「根拠ないし」と反発もしてきたが、「知ってて損のないこと」だったと今は思っている。母親は、「いつもガミガミ」言っていて、時にはうるさいと思ったが、「全く飾らない人」で「素朴にありのままの姿を見せてくれた」。お人よしすぎるが、「そこが彼女のいいところ」だと思っている。しかし、「謙虚すぎて」自分たちのことを卑下して言うことを不満に思ったこともあった。一度テストで悪い点数を取ってとても悔しい思いをしたとき、母親が自分もそんな点数を取ったことがあるという話をしてくれて「すごく安心した」。

育児の影響については、母親が自分に対してしてきたことを「そのまま受け入れて」きたし、「そのままを子どもたちに伝えたい」と思っている。母親が自分たちを卑下して言うことを嫌だと思っていたが、自分も同じようなことをしていることに気づき、今になって母親の気持ちがわかった。

【事例 E, 36 歳, 虐待なし群 (被虐待相当経験得点 5 点, 虐待相当行為 8 点)】

現在の育児について気をつけていることは、「出来るだけ子どもの要望にこたえてあげる」こと。しかし、二人同時に要求されるときはやはり困ってしまう。時間的なものなどを考慮しつつ臨機応変に対応するようにしている。子どもには、人と接する上で大切なことをしっかり出来るような子、素直な子になってほしいと思っている。

子どもの頃、母親は学校や部活の役員をしていたため、部活などでよく「一緒に泣いたり笑ったり」していた。また、仕事と家事で忙しいながらも手作りのお菓子を作ってくれ、いろいろなところに連れて行ってくれた。毎週、街へ出て買い物や食事をした。それを母親も自分もとても楽しみにしていた。「気性の激しい」母親に、忙しいときは八つ当たりされることもあった。しかし、そのときの気分で怒ることがわかっていたため、よく衝突したが、お互いその後はけろっとしていた。「私には言いやすかったのかもしれない」。子どもの頃は、「何でも話せるフレンドリーな」「言いたいことは言う」家族だったため、友達みたいな関係の親になりたいと思っており、それが普通だと思っていた。

育児の影響については、親の育児の影響はあるかわからない。親の育児の参考にしている点は、お月見やお墓参りなど季節ごとを大事にしていたこと。子どもには、今のうちに季節を感じられるようなことをたくさんさせてあげたいと思っている。勉強よりもそういった感受性を育ててあげたい。母親の育児の悪い点は、要領の悪いことだが、それは最近気付いたことであって、子どもの頃はそんなことを思ったことはなかった。

D さん、E さんでは、子どもの頃の母親との嬉しかったことや、楽しかったことに関するエピソードが生き生きと語られた。しかし、中でも母親の否定的な部分が語られたが、それは、母親を一人の人間の特性として捉えたものであった。

両事例とも現在の大きな関心は現在の育児であり、自分の被養育経験を振り返って考えることはあまりないようであった。また、親の育児や家庭環境を肯定しており、自らもそれを受け継いでいこうとしていることが語られた。子どもの頃に親と健全な親子関係を持つことが出来た人は、無意識的に親と同様の育児をしており、親の育児の影響を受けているということを自覚しているわけではない、あるいは、自分が母親となつてはじめて気づくと考えられる。

総合考察

本研究は、非臨床群の母親における虐待の実態を把握し、虐待の世代間連鎖および母親の被養育経験の捉え方が子どもへの養育態度とどのように関連しているかを検討することを目的としていた。

社会福祉法人子どもの虐待防止センター（2001）や中嶋（2005）の研究と同様に本研究においても非臨床群の母親に虐待相当の行為がみられることが明らかとなった。本研究で明らかとなった母親の虐待的行為は軽度のものであったが、母親にストレスがかかるなどすることによって、重篤な虐待へと発展する可能性もあると考えられる。よって、虐待予防の観点からも育児における母親のストレスを軽減させる要因などについての研究と関連させて研究していく必要がある。本研究において、虐待相当行為の発生には、被虐待相当経験、配偶者の協力および配偶者との関係が大きく関連していることが示唆された。このことから、被虐待相当経験は、虐待発生のハイリスク要因であり、その予防には、夫の育児協力が重要であると考えられる。土谷（1995）は、育児不安は父親の養育行動の柔軟性を母親が好意的に認知したときに母親の負担を軽減すると述べている。よって、夫の育児協力とそれに対する母親の満足度は、被虐待経験を持つ母親が虐待の連鎖抑止のための重要な要因であると考えられる。

研究Ⅱにおいては、被虐待経験の有無によって被養育経験の捉え方に大きな違いがあることが明らかになった。被虐待経験を持つ母親は、親とのネガティブなエピソードを繰り返し語る、あるいは、ポジティブなエピソードに関する記憶は「ない」という語りが特徴的であった。これは、一種の防衛機制による記憶の抑圧であるとも考えられる。一方、被虐待経験のない母親は、子どもの頃に関して語られるエピソードがほとんどポジティブなものであり、それに伴う感情も詳細に語られていた。また、語られるネガティブな内容は、母親の人格特性の一つとして語られ、母親を一人の人間として自分と区別して試みていると考えられる。しかし、被虐待経験のない母親にも葛藤を多く語る人もいた。これは、虐待的とまではいかないまでも、子どもの頃の葛藤をまだ十分には解消できていない可能性があると考えられる。このことから、質問紙レベルでは測りきれない被虐待相当経験、あるいは「虐待」という形を取らないが、虐待の引き金となる可能性のある葛藤が存在していることが示唆された。

また、虐待の連鎖に関して、連鎖なし群の母親は、親以外の大人との親密な関係を持つことが出来ていたということであった。これまでの虐待やそれに関するレジリエンス研究において示されていたとおり、虐待の連鎖を生じさせない要因に子ども時代の大人からの暖かい情緒的サポートが大きく関与していることが示された。しかし、本研究の結果では、社会的要因の存在を示したまでに過ぎず、渡辺（2000）のこのような内省的自己を持っているのか、また、知能レベルや自己効力感など、個人的なレジリエンス要因を持っているのかを検討することまではできなかった。よって、虐待の連鎖を断

ち切るための心理学的要因を個人の特性の次元からもさらに検討していく必要があると思われる。

引用文献

- Caliso, J.A. & Milner, J.S. (1992). Childhood history of abuse and child abuse screening. *Child Abuse & Neglect*, **16**, 647-659.
- 福丸由佳 (2003). 個人の発達と resilience 家族問題相談研究, **1**, 3-10.
- 平田佳子 (2001). 児童虐待に悩む母親たち ―虐待防止のホットラインの相談から 児童心理, **55**(2), 39-43.
- Hunter, R.S.& Kilstorm, N. (1979). Breaking the cycle in abusive families. *American Journal of Psychiatry*, **136**, 1320-1323.
- Kaufman, J., & Zigler, E. (1987). Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 186-192.
- 中嶋みどり (2005). 非臨床群の母親における児童虐待の認知に関する心理学的要因の検討
広島大学大学院教育学研究科学位論文(未公開)
- 中谷奈津子 (2002). 虐待の世代間連鎖と母親の育児不安に関する研究 家族関係学, **21**, 153-163.
- 西澤哲 (1994). 子どもの虐待―子供と家族への治療的アプローチ― 誠信書房
- 西澤哲 (2004). 子ども虐待の社会的病理―虐待の文化的文脈― 日本精神科病院協会雑誌, **23**, 644-649.
- 大原美知子 (2003). 母親の虐待行動とリスクファクターの検討―首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から― 社会福祉学, **43**(2), 46-57.
- Rutter, M. (1987). Psychological resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 316-331.
- 斎藤学 (1992). 子供の愛し方がわからない親たち 講談社
- Schaffer, H.R. (1998). *Making Decisions About Children*, 2nd ed., Blackwell.
- (シャフアー, H.R. 無藤隆・佐藤恵理子(監訳)(2001). 子どもの養育に心理学がいえること 新曜社)
- 社会福祉法人子どもの虐待防止センター (2001). 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書 社会福祉法人子どもの虐待防止センター
- 武田京子 (1998). わが子をいじめてしまう母親たち ミネルヴァ書房
- 棚瀬一代 (1996). 実母による乳幼児虐待の発生機序について 心理臨床学研究, **13**(4), 427-435.
- 土谷みち子 (1995). 「養育行動の柔軟性」における父母の違いとその影響―父親の生活実態・父母の体罰・母親の育児不安との関連― 家庭研究所紀要, **17**, 121-129.
- 鵜飼奈津子 (2000). 児童虐待の世代間伝達に関する一考察―過去の研究と今後の展望 心理臨床学研究, **18**(4), 402-411.
- Walsh, F. (1998). *Strengthening Family Resilience*. New York: Guilford Press.
- 渡辺久子 (2000). 母子臨床と世代間連鎖 金剛出版